

食と農のSDGsを

諏訪農ガールのつどい

諏訪地方の農業、農村に関わる女性を主に情報を交わし、農業から食や持続可能な社会づくりを考える「諏訪農ガールのつどい」が22日、諏訪市四賀のJA信州諏訪本所で開かれた。SDGs持続可能な開発目標をテーマに地元での実践例に学び、全員参加のワークショップで自らできる食と農のSDGsを話し合った。(日比野真由美)



自分のできるSDGsの実践を考え、話し合う参加者

地元の実践例学び話し合う

県農村生活マイスター協会諏訪支部と同農協女性部でつくる諏訪地区農村女性団体連携会議と諏訪農業農村支援センターが年1回開き、9回目。連携会議のメンバーや6市町村の農業委員ら約50人が参加した。

事例発表では、出荷できない野菜を地元で消費し、次世代の食と農業を守りたいと茅野市仲町にカフェ「菜のだ」を開いた石原彩香さん、子ども食堂や市民の居場所づくりに取り組み「諏訪圏域子ども応援プラットフォーム」の事務局長、木村かほりさんが話した。

石原さんは「農家とのつながりをさらに強めて、形がいびつな野菜もおいしく食べられることを伝えたい」と話し、木村さんは「子ども食堂で食事をすることも運営の支援になる。子どもの育ちを支える活動を通して地域まるごと『みんなのイイばしょ』を目指したい」と述べた。

ワークショップでは参加者がグループに分かれて身近な実践案を考えた。2人の発表を受けて「野菜の形の悪さや虫食いがあっても気にしない」「子ども食堂に足を運ぶ」

「自作の野菜を使い切る」とする思いや、「農作業ボランティアをする」「孫と一緒に野菜を作る」など幅広い視点でアイデアが集まった。